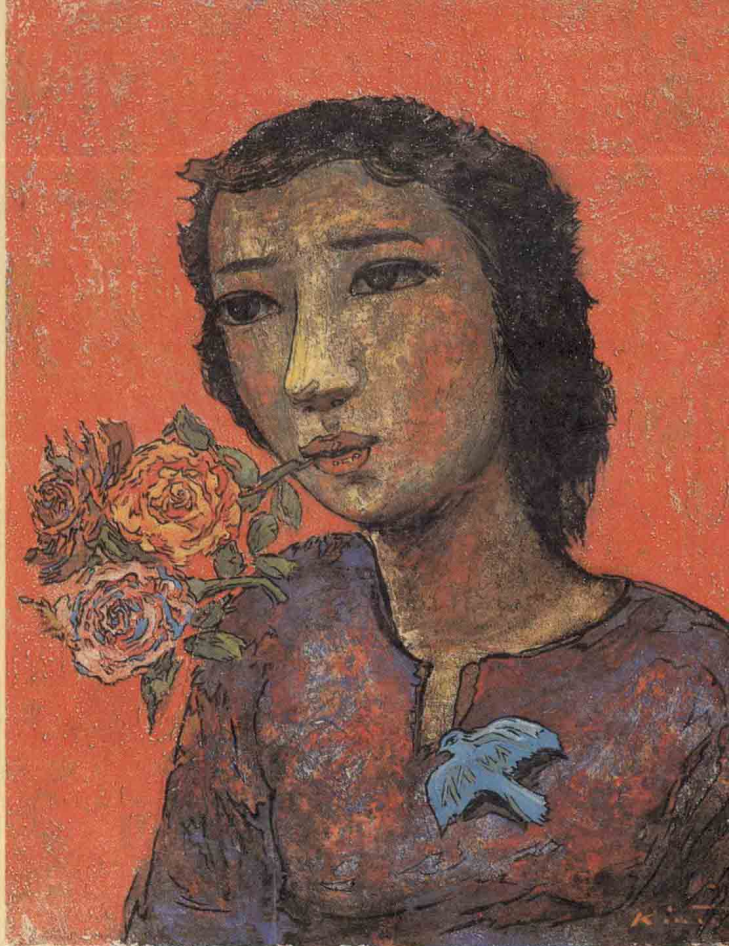


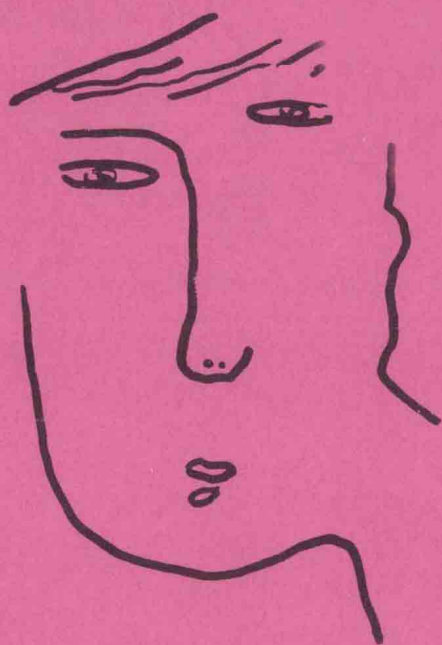
海の入日

高井有二



の入り日

高井有一



平凡社

海の入日 定価一、二〇〇円

一九八一年六月一五日 初版第一刷発行

著者——高井有一^{たかい いういち}

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番地一

郵便番号一〇二 振替・東京八一二九六三九

電話(〇三)二六五—〇四五—(大代表)

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

© 高井有一 1981

Printed in Japan

製本不良本はお取替え致しますので小社サービス課までお送り下さい(送料は小社負担)

海の入日

目次

第一部 雀夜

5

第二部 雨季

145

装幀 絹谷幸二

第一部 雀夜

雷鳴と稲妻と風雨の入りまじつた、民衆のあひだで
雀夜と呼ばれる恐しい夜がときどきある。

チューホフ「退屈な話」

先生の足が縫れてゐた。そんなに多く飲んだわけでもないのに、気が昂ぶつたせいで酔が深く
なつたのか、と先生の左腕を抱へながら、私は思った。向う側には木次洋介が寄添つてゐた。彼
の運転する車で、私たち二人は先生を自宅まで送つて来たのである。丈の高い先生の身体は私た
ちが少し手に力を籠めれば、浮上つてしまひさうに軽かつた。

玄関の軒灯は明るく、私が呼鈴を押す前に、扉が内側から明いて、眼鏡をかけた女の人の顔が
のぞいた。

「こいつ等が送つて呉れたよ」

と先生は照れたやうに言つた。

「要らん心配をしなくたつていいのに」

「まあ、すっかり酔つて。遠い所まで、御迷惑でしたせう」

その先生を窘めるやうな口調から、私は、この人が先生と一緒に住んでゐる娘さんなのだと察

した。さうだとすれば、互ひに高校生のころ顔を合せた事があつた筈だが、私の記憶には、俄かにむかしの面影が泛んでは来なかつた。

直ぐに帰らうとする私たちを、先生は引留めた。

「いいぢやないか。珈琲を一杯、飲んで行き給へ」

「どうぞ。ちよつとでも、お上りになつて」

娘さんにまで口を添へられて、私たちは上らないわけには行かなかつた。通されたのは玄関脇の、居間とも客間ともつかぬ、飾り氣のない部屋であつた。六畳ばかりの板の間にソファと低い卓とが置かれ、入口から見て左手の一段高くなつた部分は畳敷で、炬燵が据ゑてあつた。南に向いてゐるらしい窓には、濃い緑色のカーテンが重たげに掛つて、庭は見えない。

「ここへ来た事あるのか」

着替をするからと先生が奥へ行つた間に、木次が私に訊いた。

「いや。君は」

「俺も初めてだ」

先生がこの家を建てたのは、私たちが高校を卒業した後、つまり先生と別れた後だつたのであらう。それ以前、先生は長い間、親戚の家の二階に間借りしてゐた。

「何だか、寒いな」

木次は掌でしきりに膝をこすつた。十月末の、一日中曇つてゐた日の冷えが、部屋に滲んでゐた。絨緞を敷かない剝出しの床が、余計に寒く感じさせたのかも知れない。

「やあ、失敬したな」

やがて和服に着替へて現れた先生の、会の終るころは燃えるやうだつた顔から、赧味が消え、艶も失せて、ただ眠さうにうるんだ眼が酔の去らないのを示してゐた。

「まあ、今日はよかつた」

先生も寒いのか、固く腕を組んで言つた。

「それにしても、檜垣は變つたな。昔は、あんな大きな声で喋る子ぢやなかつた」

同級会をやらう、と最初にいひ出したのは、檜垣節男だつたと思ふ。尠くとも、私の所へ電話をかけて来たのは彼であつた。他の級は最近にみんなやつてゐるのだ、と彼は言つた。俺たちだけやらなくては先生に申訳ないぢやないか。全校の同窓会の幹事でもある彼の許へは、いろいろと他所の動静も伝はるのらしい。私は同意した。しかし、檜垣が日時と場所を決め、案内状を出したところ、当日出席の返事を寄越したのは、四十八人のうち、十一人に過ぎなかつた。卒業して二十七年目ともなれば、それも仕方がないのであらう。会は当然お流れだと私は思つたが、檜垣は諦めず、都合のつく者だけでも集らう、と言ひ張つて、都心の中華料理屋に席を取り、先生を招く事にしたのであつた。

「生活に自信を持つと、あんな風になるんぢやないですかね」

と木次は皮肉に言つた。檜垣は大手の百貨店の仕入部長を勤めてゐる。繊維が専門の商社の課長代理でしかない木次との間には、生活にかなりの差がある筈であつた。

「さうかな。それだけかね」

先生はいささか不満さうであつた。無理を推して会を開いた檜垣の努力を多とする気持が強くあつたに違ひない。

「お待たせして」

娘さんが珈琲を運んで来た。

「お酒のあとは、あんまり濃くない方がよろしいんでせう」

「佐緒子だ」

と先生が言つた。

「君たち、初めてだつたかな」

「いえ、ぼくはお会ひしてゐます」

と私は言つた。先生の間借りの部屋を訪ねた日の記憶が、不意に戻つて来た。

私たちが高校一年の秋、先生はチフスに罹つた。高熱で意識を失ふほどだつたが、入院のための車の都合がつかず、トラックの荷台に横たへられて、病院へ運ばれたといふ。しかし恢復は意

外に早く、一箇月足らずの内に退院して、あとしばらくは自宅で静養する事になった。どういふ経緯があつたのか忘れたが、さうした先生を級長の檜垣を初め数人が見舞に行つたのである。

先生は、深ぶかと初冬の陽の射し入る座敷に牀を敷いて、その上に坐つてゐた。まだ自分の身体が頼りないので、少し疲れたら寝るやうにしてゐるとの事であつた。

「家へ歸つて来たら、いろんな物の匂ひが鼻に付いて仕方がない」

先生は、横一列に膝を揃へた私たちの顔を、確かめるやうに一人づつ見やつた。

「病院で薬の匂ひばかり嗅がされてゐたせみだらうね。君たちだつて、実によく匂ふよ。健康の匂ひかね」

先生には、私たちをもてなさうといふ気持ちがあつたであらう。見舞に来てもろくに話題のない私たちを庇ふやうに、病気の経験をさまざまに話し、

「長く寝てると、物の感じ方まで變つて来る。化学変化は人間にも起るよ。その触媒が病氣つていふわけさ」

と笑はせたりした。先生の受持の教科は化学なのであつた。

そろそろ歸らなくてはならないと皆が思ひ始めた頃、隣室との境の襖が明いて、セーラー服の女の子が盆を持つて入つて来た。

「皆で、どうぞ」

と腰をかがめて、盆を畳に置き、私たちの方へ軽く押して寄越す。艶のいい狐色に焼上げたパウンド・ケーキが、花模様をあしらった大ぶりの皿に載つてゐた。

「佐緒子だ。君等より二つ下だよ」

先生はさう言つて、和んだ眼を彼女の方へ向けた。

「これは、御馳走をこさへて呉れたね」

「きつと、美味しくないわ」

と佐緒子が言つた。

「だつて、途中で一度、停電しちやつたんだもの」

戦後の一時期はこの家庭にもあつた電気パン焼き器を使つて、ケーキを焼いたのだらう。佐緒子の飴玉をしやぶつてゐるやうな喋り方が、私たちの笑ひを誘つた。甘やかされてゐるらしいと感じた覚えがある。

これが佐緒子と会つた初めてであつた。二度目は、もう卒業が間近い頃、夕方の教員室の戸口で擦れ違つてゐる。当時佐緒子は、私たちの学校とさう遠くない女子高校に通つてゐた筈だが、何か先生に用事があつて来たのだつたらう。私を見覚えてゐる風もなく、放課後の人気がない廊下に淡い影を曳いて去つて行く佐緒子を見送つて、私は、彼女の背丈が私とほぼ変らないくらい高いのに気が付いた。先生に似たのであらう。

「あの間借りをしてゐた家ね、今でもそのまま遺つてますのよ」

先生の茶碗に、砂糖をほんの少し入れてやつて、佐緒子が言つた。

「もう見る影もなく古びてしまつたけれど」

私たちが訪ねた頃にも、座敷の砂壁はあちこちが剥けて、地肌が出てゐたのだから、取壊されないのが訝しいくらいであつた。

「これは英語の教師をやつてゐんだ。高校でね。私は養つてもらつてゐるさ」

と先生は言つた。その薄く笑ひの泛んだ横顔を眺めて、私は、

「さうですか」

と相鎚を打つしかなかつた。先生の奥さんは十年も前に死んだのを私たちは知つてゐる。先生が私たちの出た学校を定年で辞めたあとは、商業高校の時間講師として、週一回出勤するだけなのも知つてゐる。佐緒子は珈琲を運んで来た盆を膝に置いて、居心地悪さうに傍のストूलに腰掛けてゐた。

床に爪の当る硬い音を立てて、半ば開いた扉から犬が入つて来た。耳を立て、尾を巻上げた赤毛の犬である。足取りに合せて、大きくはないが引締つた身体が弾んで見えた。

「ケミ」

佐緒子が呼んだが、犬は聞かずに、木次に近付いて、黒い鼻先を彼の爪先のあたりに寄せた。

彼は黙つて身体をずらした。私と同じやうに、犬が苦手なのであらう。

「ケミ、いけませんよ、此方へいらつしやい」

佐緒子は犬の頸を抱いて引寄せようとしたが、犬は後肢を張つて抗つた。

「秋田犬ですか」

と木次が先生に訊く。

「いや、雑種さ。先祖は秋田だつて言ふが、途中でいろいろ混つてゐるだらう」

「ケミつていふんですね」

「うん。ケミストリーのケミ」

「ああ、成程ね」

私たちは笑つた。犬の名の由来が面白かつたからよりも、犬が現れたために、やうやく気楽な話題が見付かつて、ほつとしたのであつたかも知れない。犬は、佐緒子に抑へられ、彼女の脚に横腹をこすり付けた。

「ぼくの妹が犬好きで、三匹も飼つてゐんですが、長く一緒に暮してゐうちに、人間みたいに見えて来るらしいですね」

と木次が言ひ出した。

「犬を相手に対等に喧嘩をして、出て行け、なんて呶鳴つたりしてる。他所の家へ行くとその